

赤木桁平

漱石先生に對する  
誤解に就いて



附録（中）

漱石先生に對する誤解に就いて



『新小説』の『文豪夏目漱石』で、内田魯庵ろあん氏は「人の評判によると夏目さんの作は年ましに上手になって行くというが、私は何故だかそう思わない、と云って私は近年は全然読まないのだから批評する資格は勿論ないのである」というようなことを云っておられる。

私はこの一節を読んで、内田という人は随分無責任なことを云う人だと思った。先生の作品が漸次上手になって来なかったということは別個の問題として、内田氏は

近年は全然読んでいないということをお白しながら、何を証拠として他人の漱石観を否定し去ることが出来るのだろうか。先生の近業を全然読んでいなかったら、先生が漸々上手になりつつあるかないかは一向分らない筈であるから、従って先生が漸々上手になりつつあるという他人の批評を覆えすことが出来ないのは無論、厳密に云うと、他人の批評に同感することさえ出来ないわけである。それにも関らず、内田氏は平気で他人の所説を否定している。無責任だと云わざるをえないと思う。

惟<sup>おも</sup>うに内田氏の意あるところは、初期に於ける先生の

作風なり傾向なりから未来を推して、この人は恐らく今後これ以上に発展すべき人じやあるまいと軽断したのであろう。その軽断が氏をして何となく人の批評を否定するような気持ちに導いて行つたのである。若し<sup>も</sup>そうだとすると、今度は内田氏の見識が問題となつて来る。試みに氏よ最近に於ける先生の作品二三を執つて、初期の作品と比較せよ。その間に存する先生の素張らしき生長（勿論芸術家としての）は、恐らく氏をして氏の軽断を恥じさせるに十分であらう。

また内田氏は、如何にも權威ある口調で「そして一

つ附加えれば、夏目さんは、殆んどと云つても好い位くらい西洋の新しい作を読んでいないと思う。それは三四年前に、マローの『ファウスト』とかスペンサーの或る作とかを頻しきりに耽読していられたことから見ても解るであろう」と云っているが、これはその臆断が事実として大いに誤っているばかりでなく、その推論の過程そのものまでが馬鹿馬鹿しく無鉄砲に出来ている。仮令たと三四年前にマローやスペンサーの作を読んでいたからといって、それで何故西洋最近の作を読んでいないということの証拠になるのだらう。なるほど先生は古いものを好んで読ま



れたに相違ないが、それと同じく新らしいものも好んで読まれたのである。殊に英国に於ける最近の作家のものは、それこそ殆んどと云つてもいい位読破されていると思う。メレデイスやスチブンソンは勿論、キプリングやコンラードのものは、皆丁寧に読まれたものと見えて、その或るものには巻尾に読後の感想を記したものがある。シヨ一の戯曲はそう沢山読んではいられなかったかも知れないが、ピネロのものは大抵集められている。そして矢張読後の感想が書いてある。オスカー・ワイルドやジョージ・ムーアなどは先生の寧ろ嫌いな作家であつ

たらしいが、それでも眼<sup>め</sup>星<sup>ぼ</sup>しいものは大抵読んでいら  
る。自分は先生から親しく『テス』の話聞いたことが  
あるから、トマス・ハーディなども読まれたに相違ない。  
ずっと最近の愛<sup>アイ</sup>蘭<sup>ランド</sup>の作者のもので、先生の眼は随分  
広く行互っている。

大陸のものではフランスのものを一番多く読んでいら  
れた。殊にアナトール・フランスの作品やモーパッサン  
の作品などを好んでいられたようである。前者のもので  
は『シルヴェストル・ボナールの罪』と『タイス』とを  
挙げ、後者のものでは『ピエルとジアン』と彼れの短篇

とを挙げて、皆勝れた作品だと云われた。フローベールの『ボバリイ夫人』に就いての感想を聞いた時には、「かなり以前に読んで非常に面白かったという記憶を持っているが、今は詳細を覚えていない」と答えられた。ゾラは先生には人氣が悪かった。すこし古いものになると、ドオデエでもゴーチエでもメリメでも褒めていられた。独逸のものではどんなものを読まれたか知らないが、ハウプトマンやズーデルマンのある作に就いては、自分が親しく先生から意見を聞いたことがある。北欧のもものはイブセンやビョルンソンなども随分読んでいられる

し、ツルゲーネフなども全集を持っていられる。アンドレエフやゴルキーのものもかなり眼を通していられたようである。殊に最近先生がドストエフスキーやトルストイの作品を耽読せられたことは世間周知の事実であつて、茲ことに事々しく云うまでもない。この意味に於いて、自分は内田氏の見方よりも寧ろ戸川秋骨しゅうこつ氏の所謂「夏目氏はイギリス文学のみでなく、人に吹聴広告こそしなかつたが、大陸の文学に就いても随分知識をもつて居られた。否恐らく世間の吹聴者以上の知識をもつていられたらしい」という言葉に無条件で賛成する。

内田氏の論法を是認すると、「内田という男は以前芭蕉の伝記を書いたり俳諧の書物などを集めていた位くらいだから、一向外国語は読めんらしい」と云うような論法まで是認しなくてはいられなくなる。



正宗白鳥氏は『夏目氏に就いて』という短い文章の中で、さも鬼の首でも取ったように欣よろこんで、先生が臨終の床で云われた「死んじや困るから注射をして呉れ」と

いう言葉を振り廻し、茲にも氏一流の自然主義的人生觀に立って先生の死を批判しているが、よく考えて見ると、これなども随分滑稽なことであると思う。

それが仮令たといいい意味であろうと悪い意味であろうと、人が死ぬる瞬間に云った言葉を過重して、その言葉の中に、その人の生涯の鍵が潜んでいるように考えるのは悪い癖である。どれだけ死というものが重大な意義を持っているにしたらところで、その死の瞬間と、その生涯の全体とを比較して死を同等若くは同等以上の意義に見出さうとするのは無謀である。自分等がその人を批判し、そ

の人を評価するためには、何処までもその人の生涯に就いて見なければならぬ。死ぬる一瞬間を支配するすべての事実が、その人の生涯のすべてを覆えすに足るだけの有力なものと考えるのはあまりに人生というものを見<sup>み</sup>縊<sup>くび</sup>り過ぎた傾きがありはしないであろうか。漱石先生の言葉にしてもそうである。先生が死に臨んで仮令「死にたい」と云おうが「死にたくない」と云おうが、それはどうでもいいことである。先生を観るには、どこまでも先生の生涯を見ればいい。先生の死に対する真当の考えは、先生の生涯の方によく現れているはずではないか。

正宗氏の態度は、恰度「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」という言葉を捉えて、盛んにキリストに喰って蒐るかか異教徒のような態度だ。何となく卑陋ひろうな感じがする（中村星湖せいこ氏も云い方はすこし違って居るが、矢張やはりその考え分に於いて正宗氏と同じ誤謬に陥っている）。



秋田雨雀うじやく氏は、「夏目さんその人は、随分時代を構わぬ人である。西洋風にいうと、一種の時代錯誤の人であ



る」という見方から、「厳密な意味では夏目さんは現代の日本には生きていなかった」というようなことを云っている（岩野泡鳴ほうめい氏の批評にもそういう意味の言葉があった）。この批評は一見真を穿っているようでもある。併し、よく考えて見ると、矢張先生に対する誤解の一種と云っていい。

なるほど、漱石先生は現代の日本の思潮に触れて、一々その思潮に接即を保ち、その思潮の動揺によって影響されるという風な人でなかったという意味では、雨雀氏というごとく慥たしかに時代に構わぬ人であった。併し、それ

を以て直ちに先生を時代錯誤の人であるというのは誤っている。時代錯誤の人というのは、その時代には何等の関係もない、何等の心的交渉もない人間を云うのであって、若し今の日本に藤田東湖とうこのような人が生れたら、それこそ時代錯誤の人と云っていいかも知れない。先生は大いに違ふ。先生が時代に構わぬのは一に時代に超越して時代という様なものを透して人間を觀なかつたからである。言葉を換えて云うと、先生は直ちに人間の姿と人間の心とを見た。その人間の姿や人間の心はいつの時代でも、いずれの土地でも變りのない恒久不變の本質であ

って、時間や空間の支配を受けない絶対のすがたである。こういう意味に於いて、時代に構わない先生はまた同様にあらゆる時代に構ったといつてもいい。ソフォクレスが数千年の昔に書いた悲劇を読んで、自分等が現代の作品を読んだよりも以上に動かされるのは、ソフォクレスの書いた人間の姿なり人間の心なりが、取りも直さず、数千年前のギリシアと云う時空的な制限の上に囚われていなかったからである。従つて芸術家たるソフォクレスは、その本質に於いては、たとい仮令現代に生れて来ても矢張現代に接即を保っているものであつて、決して時代錯誤

の人ではない。漱石先生の場合に於いてもまた然りである。

雨雀氏のいうがごとく、若し先生の商品が明治とか大正とかいう時代に今よりももつと接触した意義を持っていたならば、それこそ先生の生命は短いものであつて、今の時代が過ぎ去つて終しまうや否や、先生の作品は世の中から忘却されて終うであろう。こういう見方から自分の決論は自然雨雀氏のそれとは反対の方へ傾いて来る。即ち「在生の時代に愛せられた割合に、次の時代では作家として明確な影響や感化を残すまいと思う」という氏の

決論に対して、自分は寧ろ「在生時代に愛せられたよりも違った意味で、必ずや次の時代に影響や感化を及ぼすに相違ない」と云いたいのである。



島村抱月氏の『初めから固定していた人』という文章を見ると、氏はその文章の中で「どうもあの人（夏目先生を指す）は最初から腰の据った人生の観方をしていて人ではなかったかと思う。前にも云った通り晩年の作品

を読まないから分らないけれども、恐らくあまり変化しない作者ではなかったか、人間に於いても創作に於いても」と云っている。

先生の態度が何処となく腰の据って居たようなところがあるという観方は、秋田雨雀氏の説と一味相通じたところがある。氏等のこうした観方に対して、自分は殊更に異議を提出しようという気はないが（と云って、是認するわけでもない）併し、漱石先生の晩年と初期との間に余り変化がないという島村氏の説にはどうしても服する事が出来ない。これは先生の作品を順次に読んで見た

らすぐ分る事で、茲ここにわざわざ取上げてかれこれいうのが既に馬鹿らしいことであるが、世間にはどうも氏と同じような観方をしたがる人があるから、この機会を利用して一言して置きたい。

勿論、先生の芸術家としての生涯には、動揺と名づくべきほど顕著な変化はなかったかも知れないが、併し、先生ほど断えず変化に変化を累かさねて進んで来た人はすくない。その変化も、今日から見ると、常に先生の生長を語る者であって、恰ちようど度芽生が何時となく樹木となり、子供が何時となく大人となるように、先生の生長は断え

ず隠約の間に遂げられていた。従って一寸見ただけでは大して差違はないが、併し、ある時日の間隔を置くと、随分素張しい変化を示しているのである。殊に『三四郎』と『それから』との間や、『道草』と『明暗』との間などには、随分著しい変化があつて、何人にもすぐ看取することが出来ると思う。尤も茲に一言附加えて置きたいことは、自分が茲に指して先生の変化というのは、白が赤となり、赤が黒となる底の本質の轉換をも意味するよ  
うな一足飛びの変化ではなくて、むしろ前の本質が土台となつて、それが徐ろおもむに新しい何物かを附加して行く



というような意味の変化であって、その結果からいうと、全く醇化とか、精化とかいふべき性質のものである。

また島村氏が漱石先生の特徴を約言して「パラドキシカル・ヴュー」などと云っているのは、殆んどほと呆れ返つて物が云えない。なるほどそういうものもあるであろうが、それは先生の芸術を形作る極めて細微な部分に過ぎないものであつて、先生の芸術の特徴とか何とかいふべきものではない。全体人のものをロクに読みもしなくつて、それでかれこれ権威ある批評を逞しうするということとは、彼れ自身の態度が不真面目であるばかりでなく、

その批評をされる当人に対しては、甚しく非礼の行為だ  
と思う。こういう人間がこの頃の文壇にはあまり多過ぎ  
るような感じがする。



徳田秋声氏の先生に対する批評には随分変なところが  
多いようであるが、中にも次ぎの一節などは、果してど  
ういう意味であるか自分にはよく分らない。その一節と  
いうのは「私も氏の立派な人格の人だったことを疑わな

い。私の知った範囲では極く潔白な義理堅いそして常識の発達した人で社交的のことにはきちんとした紳士であったと思う。然し社交的美徳と人道的徳義とはおのずから別であることを忘れてはならぬ。この二つのものを混用してはならぬ」というのである。

この一節を字義的に読んで来ると、徳田氏の先生的人格に対する批評は、その社交的な美徳は十分認めるけれど、併しその人道的徳義に就いてはかなり疑惑を持っているという風に解釈されるようだ。若しこの言葉が、徳田氏が、何か含蓄ある言葉を吐こうと思った結果、不用

意に口を滑らした言葉に過ぎないものだと思えば、それは多く問題とするに当らない。併し、徳田氏の真意が何処までもこの一節が表現するようなところにあるとする、自分は聊いささかか徳田氏に反問したいと思う。全体氏は如何なる根拠によつてかくの如き言葉を弄せられたかと。

元來他人の人格に対して誹ひ譏きの言を弄する時には、十分根拠ある具体的な事実か、然らずんば、それを忖度するに足る十分な材料を持っていなければならぬ。然るに氏は何等の事実、何等の材料をも提供することなく、

漫然とかくのごとき言を弄しているのであるが、それは余りに無責任な放言である。自分は後日の参考のために、何故氏が漱石先生の人道的徳義を怪しむに至ったか、その理由に就いて悉くわしく氏自身から聞きたく思う。その理由を解明することは、いうまでもなく氏の人道的徳義が氏自身に向って命令するところであらねばならない。



岩野泡鳴氏の談話の中に、いくたちようこう生田長江氏の言葉として

「夏目という人はどんな真面目なことをも不真面目に解釈してしまわなければ満足出来ない人だ」ということが伝えられている。

自分は茲ここを読んだ時に、如何にも長江氏のいいそうなことだと思った。これこそ島村氏の所謂パラドキシカル・ビューであって、自分等から云うと、全く真理を逆様さかさまに云っているような気持がする。長江氏は果してどういう関係の下に、どういう接触を先生との間に保たれたかは知らないが、自分等の経験から云うと、先生ほど不真面目なことをも真面目に解釈しようとはせられず人はずく

ない。この言葉が悪ければこう云い換えてもいい。先生ほど物事を真面目に解釈しようとする努力して、しかも不真面目なことにばかり出会ったという経験を強く感じた人はないと。

先生が露ほどの不真面目をも仮借しない人であったことは今さういうまでもない。先生は人に対して、世間に対して、やが臆てまた自己に対して、常に真面目ばかりを要求した。併し自己が真面目であるほど、人や世間は真面目でなかった。否彼等は大抵の場合不真面目そのもの云ってでもいいほど不真面目であった。しかも更ににく悪むべ

きことは、人や世間がその不真面目を隠すために、常に真面目という看板をかけていることであつた。真面目な先生はそれを真に受けて、どれだけ苦い経験なを嘗めさせられたか知れない。その結果、先生は兎角とかく人や世間を疑惑の眼を以て見られるようになった。その疑惑の眼を注がれたものは、すぐ早合点をして、先生はどんな真面目なことでも、皆不真面目に解釈しなければ承知しない人だと考える。併し先生の態度に注がれているその人の眼いは、自分自身の所謂真面目わゆるに対してはすこしも注がれていない。もっと適切に云うと、自分が何等の不安もなく



大真面目であると考えていることが、案外不真面目な因子を多量に包含していることには気が附かなくて、無暗むやみに相手の批判ばかりを疑うているのである。——この場合に於いても、先ずそうだと云ってよかろう。

実際先生ほど不真面目なものを真面目に考えたかった人はすくない。併し、先生に対して存在した人や世間は、折角の先生の望をも蔑ないがしろにして、どうしても先生をそうさせないほど意地悪く不真面目であつた。自分は先生の生涯を気の毒に思う。



例の三井甲之氏こうし及びその信仰者等の或者は、常に漱石先生を以て趣味の人であると云い、信念の人ではないと云っている。この批評なぞも随分いい加減の、当てずっぽうの批評である。

三四日前の『時事新報』紙上に於いても、三井氏は「漱石氏の琴棋書画趣味」とか云っていた。なるほど先生が三井氏等とは違って、書や画の面白味を感じ、しかもある程度までその道に自得するところがあつたのは事実で

ある。併し、それを以て直ちに先生が趣味の人であつて、信念の人ではないという決論は生れて来ない。三井氏の考えでは、書や画も一般人から多く一種の道楽として弄ばれるものであるから、ああいうものの好きな漱石は、恐らくその芸術に参する場合に於いても、これを一種の趣味としか考えていないのである。早呑込みをしたものに相違ないが、それはあまりに呆れ返つた浅見である。全体趣味の人であつたら同時に信仰の人ではありえないという風な三井氏の前提からが誤謬だらけのものであるが、仮りに三井氏の前提を無条件に容認して考えて見た

ところで、三井氏の考えている趣味というものに参する心持と、漱石先生が書道や画道に参する心持との間には、果してどれだけの相違があつたか、それに就いて三井氏はすこしも考えたことがあるだろうか。人生の内面に交渉する点から云うと趣味といい、信仰というも単に程度が齎もたらす差であつて、その間に本質的な区別があるわけではない。しかも先生は書道や画道を楽しむ空氣の裡にのみ生き、且つ書道画道を楽しむ態度を以て人生に対していたのではない。先生には先生本然の姿があつて、その姿から派生されるすべての活動が、一面に於いては小

説となり、一面に於いては批評となり、一面に於いては書道となり、一面に於いては画道となつたものであつて、こういう意味からすると、先生の生涯に於ける万般の努力は、そのすべてが皆先生という人格の中に把握されている信念から流れ出たものといふのを至当とするだろう。言葉を換えて云うと、先生の書道趣味、先生の画道趣味、若くは先生<sup>もし</sup>の低徊趣味は、それが趣味であることに依つて信仰であり、それが信仰であることに依つてまた趣味であるのである。

すべての論議は無用である。ただ一言でいい。若し信

念の人でなかったら、どうして先生ほど確実に、先生ほど真直ぐに、先生ほど合理的に生きることが出来たであろう。







日本文学電子図書館

---

附録（中）漱石先生に対する  
誤解に就いて

著 者：赤木桁平

制作者：宮澤一郎

底 本：「夏目漱石」

講談社学術文庫、講談社

2015年12月10日 第1刷発行

---

日本文学電子図書館